

木村 マサ子/きむら まさこ 1945年、函館市に生まれる。77年から、函館市土木部公園緑地課の嘱託指導員として函館公園に勤務。仕事として函館山の巡回が始める。92年から12年間、函館山ふれあいセンターの自然観察指導員として活躍。函館産業遺産研究会の会員として函館要塞跡の調査に深く関わる。03年、北海道アウトドアガイドの認定を受ける。



1「カエルを見せたら亀と言われましたよ」「今の子はカエルの卵も見たことないんだ」ふれあいセンターで後輩の指導員と談笑するマサ子さん 2「春は登り目線で草花を楽しむ。冬は下り目線で函館の街並みを眺めながら降りるのがいいの」マサ子さんは決まった場所で同じ解説なんかしない 3「函館山で拾ってきた石を削って貼り付けたりしてさ」全盲の学生たちに、どんな山道を歩くのか知ってもらいたくて制作した模型 41899(明治32)年の要塞工事の地図を模型にして、現存する要塞跡の調査に役立てた(高さ1/2500 面積1/5000)

連れて行った。子どもを見かけると「こんな子どものいる家族にも手榴弾を投げて、吹っ飛ばし殺してしまつた」とつぶやいていた。深い心の傷を癒すために、函館山の自然を求めたに違いない。5円玉2枚で鳥の鳴き声を出すことも、野鳥を餌付けする方法も、叔父から教わつた。「だから私、傷ついた野鳥をたくさん保護してるの」。函館山はマサ子さんにとって、すべての原点である。

## 納得がいかないときちんと伝えられない

「花や木の名前を覚えればいいと思って始めたガイドだけど、朽ち果て、その存在も草木に埋もれつつある要塞の解説も、きちんとしなかった」。何のために、どのように造られたのか、資料を探し始めたのがきっかけである。要塞地帯法が公布された1899(明治32)年から100年目の年、友人の伝手で国会図書館の資料を入手。

さらに北大工学部に函館要塞を卒業に選んだ学生がいたことを思い出し、彼の論文から想像以上の資料が防衛庁の戦史資料室に残されていることを知り、実際に資料室へ2度も足を運んだ。「もっと、知りたい」気持ちが出

て進む。『函館産業遺産研究会』の富岡由夫会長に収集した資料を渡し、函館山の研究価値をアピールした。「なんでそんなことを調べらんだ」と市役所に保管されている地図のコピー許可が下りないこともあった。新説を報告しても、まったく受け入れられない郷土史家もいた。それでもかまわない、調べなければ気がすまない。終戦当時の要塞施設を手書きしたポロポロの地図を

頼りに現場の確認作業が始まった。「いちばん嬉しかったのは、千畳敷で日本煉瓦の刻印を偶然見つけたとき。要塞築造の年代を割り出す貴重な手がかりにもなる発見だったので、雨が降つてたのに、スキップして帰りたいくらいの気持ちだった」だが、これらがさえも、後に研究者には否定されてしまう。

## 函館山はどんな話にも結びつけることができる

自分が納得したいから調べ尽くす。マサ子さんの行動に「徒労」がない。「自分で調べると感動するよね。発見する喜びがあるよね。そうすると、人に喋りたくなるのさ」。マニュアル通りじゃないガイド。これはもう天職である。

誰が相手でも、遠慮なく浜言葉を使う。小学校の作文で直されることもあった。でも、マサ子さんは違うと考える。土地の言葉でしか伝えられないことがある。たとえば、函館は7月までガスがかかり、蝦夷梅雨がある。だから「暑い」ではなく、湿気を感じる「ぬぐい」と表現する。その方言を聞くだけで嬉しくなるのに、いま使う人はほとんどいない。

「要塞は確かに軍事的なものだけど、函館の歴史や産業、自然科学、土木技術、造船の話まで、あらゆる話に結びつけることができる。自分さえ勉強すれば、ガイドの種はつきない」。しかも、手抜きできない性格らしい。全盲の学生たちが来るとなれば、手でさわって確認できる模型地図をつくる。聾啞者が反応して発した言葉を聞き取れなかったと思ひ出しては涙ぐむ。山に登らなくても、会いたくなる人である。



函館山と砲台跡

函館山は明治期 国によって大がかりな要塞化が進められた。その後、第二次世界大戦後まで立入制限されたため、要塞の存在自体はほとんど知られていなかった。一方で、人が入山しなかつたおかげで、貴重な動植物の宝庫としての価値を増すことにもなった。封じられた歴史と自然に触れる、この山ならではの散策コースが一般開放されている。